

5. 末梢血幹細胞移植後、肺抗酸菌感染症を認めた1例

東田 正陽*, 岩村 喜信*, 中原 康雄*
青山 興司**, 片山 修一**, 浅井 武**
向井 亘**
河合 泰宏***

(川崎医科大学 小児外科*)

(国立病院岡山医療センター 小児外科**)

(川崎医科大学 小児科***)

2歳10ヶ月女児。左後腹膜交感神経幹原発・神経芽細胞腫 stage 4に対して、術後、98new A1 1クール、98new A3 4クール施行後、PBSCTを施行した。治療終了後7ヶ月後のfollow up CTにて腫瘍陰影を認め、肺転移と考え摘出したが、肺抗酸菌感染症であった。自己末梢血幹細胞移植は比較的免疫抑制も軽度であり、抗酸菌感染症の報告も稀であるため、ここに報告した。

6. 神経芽細胞腫の化学療法で自己末梢幹細胞・骨髄移植後、肝中心静脈閉塞症 (HVOD) と無石胆嚢炎を起こした1例

松岡 尚則, 谷口 寛, 中野 琢己
秋森 豊一, 濱田 伸一, 杉本 健樹
小林 道也, 荒木京二郎
(高知大学 腫瘍局所制御学)
久川 浩章, 脇口 宏
(同 小児思春期医学)
松浦喜美夫

(仁淀地区国民健康保険組合病院)

5歳男児。神経芽細胞腫の化学療法で自己末梢幹細胞・骨髄移植後0日目にMcDonaldらの基準を満たし、HVODと診断された。移植後12日目にJonesらの基準を満たした。超音波パルスドプラ法による門脈血流測定はHVODの診断に有用であった。移植後25日目に無石胆嚢炎発症したが保存的治療にて軽快した。HVOD、無石胆嚢炎共に死亡に至ることもある合併症であるため、移植後には注意が必要と考えられた。

7. ヘルニア根治術時に発見された精巣腫瘍の1例

朝川 貴博, 大塩 猛人, 篠原 永光
日野 昌雄

(国立療養所香川小児病院 小児外科)

乳児における表在性血管粘液腫 (Superficial Angiomyxoma) を経験した。患児は3ヶ月の男児、ソ径ヘルニア根治術施行時、右精巣腫瘍に気づいた。X線検査で腫瘍に粒状の石灰化、超音波検査では、精巣との境界明瞭で、やや high echo な腫瘍を尾側に認めた。腫瘍マーカーの上昇はなかった。ヘルニア根治術と同時に腫瘍摘出術を施行した。精巣の尾側に腫瘍を認め、腫瘍の残存なく容易に摘出できた。摘出標本は2.5×2×2cm大、重量3g、表在性血管粘液腫と最終診断された。

8. 陰茎白膜から発生したと考えられる陰嚢内未熟型奇形腫の1例

大津 一弘, 古田 靖彦, 鬼武 美幸
(県立広島病院母子総合医療センター 小児外科)

1ヶ月男児、出生時の陰嚢内のさくらんぼ大の腫瘍が生後1ヶ月で胡桃大に増大。陰茎腹側やや左側に陰茎に接し径3cmの表面平滑で弾性硬の腫瘍を認め、エコーで径30mm、嚢胞と充実性部分が混在、石灰化あり。手術時、腫瘍は尿道海綿体白膜に癒着、全摘。マクロで大小の嚢胞と充実性部分が混在し、ミクロで未熟な骨、軟骨組織、神経組織を認め、診断はImmature teratoma; Grade II。術後8ヶ月再発なし。

9. 鼠径部に発生した脂肪芽腫の1例

上田 祐華, 檜山 英三, 山岡 裕明
末田泰二郎

(広島大学医学部・歯学部附属病院 小児外科)

症例: 7ヶ月、女児。主訴: 右鼠径部腫瘍。現病歴: 4ヶ月時、某小児病院で右鼠径ヘルニアの診断にて手術。同日血腫の診断で再手術。その際、右鼠径部に直径12mm大の腫瘍を認め、リンパ節の腫大と診断。その後も右鼠径部の腫瘍は消失せず、転居に際し当科紹介受診。右鼠径部に腫瘍、ならびに右下肢腫大を認め、CTで腫瘍は腹腔内